

『聖火』は平和の象徴か？ 慈しむ心は、国境を越えて

5月に入りました。5月の別称に

は、**臯月・早苗月・橘月・五月雨月**。

月見す月・五月・たぐさ月、と沢山の良い別名が存在しています。空は明るく、活気溢れる月というイメージがあります。曆の上では「5日」立夏節の日から5月ということになっています。

明るく活気のある青空の中で、5色の吹き流しと共に泳ぐ鯉のぼりで象徴されるように、5月5日は男子の節句の日です。青空の下で元気いっぱい泳ぐ鯉のぼりは、強く落下する滝の激流に鯉が逆らいながら登っていき、滝に登り着くと、龍に変じて天空に飛んでいくという「中国」の「登龍門」の故事がもとになっています。どこの家でも子供の出世を願って、男の子の成長にとってシンボリックに鯉のぼりを風に泳がせているのですね。

さてその「中国」では今年、北京オリンピックが開催されます。オリ

ンピック開催にあたり、恒例の聖火リレーが行われました。がしかし、その聖火リレーはお粗末な結末となりました。わが日本でも、長野県は善光寺からのスタートを断念しました。これは一体どうしたことなのでしょうかね、あの様な暴動が各地で繰り広げられたのでしょうか？平和の象徴と言われる「聖火」に対して、罪を犯しても「NO」と訴える、あのチベット人達の心持はどの様なものだったのでしょうか？

中国やチベットの生活に詳しい、ヒマラヤトレッキングガイドを務める、辻斉先生とお話する機会があり訪ねてみました。すると中国人は、チベット人の大切にしてきたチベットの文化、歴史、言語、土地、宗教等々、何もかもを奪い取ろうと政治的権力行使して、やつきになっていく現状が間違いなく「ある」という事なのです。言ってみれば、チベット人僧侶達のデモ行進は、今日までの迫害や弾圧という歴史の火種が一気に点火したに過ぎない出来事でした。中国人達は、そんなチベット人僧侶達の事を「布をまとった泥棒」と彼らを称しており、人権尊重なんて微塵も感じられないような扱いをしているのだそうです。

この様なチベットでの武力鎮圧については、「中国はやりすぎだ」がまず世界的な共通認識だろうと思います。でも中国は常にチベットを激しく弾圧してきた歴史があります。そのやり過ぎた張本人は、こともあろうに現在の中国の総書記の立場にいる胡錦濤氏です。彼は、20年前のチベットに起こった独立運動を沈静化するために、多くの人を虐殺しました。その鎮圧の功績(?)があつてこそ、総書記という今の地位がある事を、私達は認識しておかねばなりません。彼らは60年近く前に、毛沢東が作り上げた版図を守ることが、歴代の総書記の役割と心得ているかのようです。

もともと中国は、「やらねばならない」とは徹底的にやる、「そのためにはどんな犠牲をもちとわぬい」「原則主義で例外は認めない」という気風があります。その結果、たとえ百人、2百人の命が失われたとしても、あまり影響されません。そういう主義を持つ人が近代の中国には多いそうですね。このまま事態が悪化していけば、中国は世界中から相当非難されることとなります。それにしても中国は、何ゆえそのように強硬手段でチベットを統治しようとするのでしょうか？それは、金属鉱物資

源・チベットの西の辺境キャンツェ（江孜）盆地には、超大型石油・ガス田と大規模オイル・シェール鉱床が発見されているらしく、中国にとつてチベットの豊富な資源の本格的な採掘が始まれば、アフリカや、その他リスクの大きい遠い外国の資源への依存を減らすことができるわけであり、チベットの地政学的な価値は極めて大きくなります。更に、そんな採掘された資源の輸送手段にはチベットの地下資源でもある、約3千2百億円かけて建設された、青藏鉄道がその姿を地中に隠しており、要するに中国は、チベットを弾圧侵略する事により、その所有している資源メリツトが沢山あるという事情がある様なのです。

チベット人とすれば、そんな中国に、平和の象徴である「聖火」が灯ること自体許せないという事になるのは必然と言えましょう。

考えてみれば「中国」という国は、もともと素晴らしい文化の国でした。私達の祖先達はその昔、命を懸けて舟に乗り込み、何ヶ月もかけて中国へ渡り、中国の素晴らしい文化を少しずつ取り入れてきました。仏教（哲学）・漢字・古典（四書五経・孫子・

論語・老子・莊子・菜根譚等の思想)、茶道等々です。それらは現代の私達日本人の精神性にも大きな影響を与え続けている事柄が多くあります。

かつては、目に見えない精神性を重んじていた中国人達がどうしたものか？現代を生きる中国人達の中では、貧富の差が激しく(日本而言えば、勝ち組負け組)、それによって人民の心は荒廃しています。貧富の差が激しくなればなるほど、目に見える裕福な生活に憧れを抱き、それを追い求める人達が後を絶たなくなるのは必然なのかもしれません。

地域の問題の根源に共通しているのは、「異民族・異文化による統治」です。そのために紛争は複雑化し、容易なことでは解決を見ません。中国とチベットも同じことが言えます。

統治する為政者が、違う宗教の人、違う民族の人を送り込むから、独立の機運が高まった時には複雑化します。ある日、「昨日まで共産主義でしたが、今日からはやめます」と宣言すれば、共産主義から脱却することも不可能ではありません。ところが宗教や人種になると、「ある日を境

に、チベット人から中国人になりなさい」というわけにはいきません。

今回の暴動事件を私達は、単なる嫌がらせや、チベット人による単なる自己主張などととらえてはいけません。

私達1人1人もそうであるように、世界中には不条理の中、たくさん救いを求めている人達がおられるんだ、ということに改めて認識し直し、地球に住む私達が皆で手を携えて、協力していく、そんな目に見えない精神を高めて、1つになっていくように努力しなければ、地球全体の問題である、地球温暖化等の、目の前にある危機的状況にも気付かぬまま、愚かな争いが絶えることはないでしょう。世界中の人々が、国籍を超えて、建て前ではなく、心から平和を願い、その崇高な思いの実現に向けて相互協力していく時なのであります。「今更」ではなく、「今更」なのです。

ダライ・ラマ14世は演説の中で「慈しむ心・思いやりの心」というキーワードを連発しておられました。「人を愛するのに、人を大切に**する**気持ちに**国籍なんてない**」と思います。私達のその思いは、まず目の前にある大切な「家庭」からです。その1人1人の相

手を思いやる心掛けが、引いては地域を、国を、世界を照らしていくものになると信じ、祈るばかりです。

合掌 副住職 谷川寛敬